

リリー由梨（篠原由梨）

Lilly (Shinohara) Yuri

タフ＆エレガント アカデミー



自己肯定感を高めることが その後の豊かな人生に 結びつく

リリー由梨さんが主宰する「タフ＆エレガント アカデミー」の名前は、少女時代から懸命に打ち込んだクラシックバレエに由来する。観客には優雅に踊る姿しか見えないが、トゥシューズの中は血まみれで本当に痛いそうだ。その痛みを耐え、それを見せずにエレガントに踊ることが求められるバレリーナの姿こそ、自分が幸せをつかむための道そのものだとリリーさんは語る。本物のエレガンスとは、見た目の美しさだけでなくタフさを内に秘めたものなのだろう。
(本紙主幹・奥田芳恵)

オーストラリアの 小学校で発見したこと

奥田 リリーさんは、長年、中学・高校の教師を務められた経験から、タフ＆エレガント アカデミーを主宰され、現在は文字どおり、タフでエレガントな大人の女性の育成に取り組まれ、女子教育専門家としてご活躍です。現在の活動に至るまでの経緯をお話いただけますか。

リリー 私の家は四代続く教師の家系で、幼稚園の先生から大学教授まで、曾祖父以降、先生になった人がとても多かったんです。そんなこともあり、大学は英文科に進んで教職課程をとったものの、私自身は教師になるつもりはありませんでした。ところが、教職の勉強をしているうちにこれが楽しくなり、母校での教育実習から戻った後は、「これが私の天職だ」と思えるようになっていました。

奥田 最初はなんとなく反発していたものの、教

師のDNAはしっかりと受け継がれていたのかもしれないですね。

リリー そこで、大学の指導教授に「ちゃんとした英語の先生になりたいので、もう一度留学すべきか」と相談しました。

すると教授は「過去に一度留学経験があるのだし、英語教師の留学経験者はいくらでもいるのだからそれは意味がない」とおっしゃり、その代わり、あるプログラムにトライすることを勧めてくださいました。



PROFILE 京都府生まれ。大学卒業後の1年間、オーストラリアの小学校で日本語と日本文化を教える。帰国後、共学の公立高校で英語教師を務め、その後、中高一貫の女子校に赴任。同志社大学大学院修了後、関西の女子校に赴任。大学院での研究と教育現場での経験から独自のメソッドを考案し、現在は「魅せる話し方講座」をはじめとする講座や研修、講演を行っている。2019年、「ミセス日本」グランプリ受賞。著書に『思春期の女の子を「タフでエレガントなレディ」に育てる7つの法則』『現役教師×僧侶社長が教える 子供が幸せになる教育法』（共著）がある。

構成／小林茂樹
text by Shigeki Kobayashi
撮影／長谷川博一
photo by Hirokazu Hasegawa
2026.6.3／東京都千代田区のBCNにて

大切にしている 茶器

画像の茶器は、リリーさんが生まれたときにご祖父様が焼いてくれたもの。孫娘に対する深い愛情と、日本古来の文化を大切にする気持ちが伝わってくるようだ。



奥田 それはどんなプログラムですか。

リリー 私の在籍していた大学とオーストラリアの教育局が提携を結んでいた関係で、1年間、現地の小学校に勤務しました。派遣という形ではありましたが、身分は教師として採用され、日本語と日本文化を教えてきました。

奥田 オーストラリアでは、どんな発見がありましたか。

リリー オーストラリアの教育プログラムが、いかに自分に自信をつけさせるか、自己肯定感を育むかというカリキュラムだったんです。2年制の幼稚園から小学校6年生までの8学年の一貫校に勤務し、私は全ての学年で教えたのですが、どのクラスの先生も、生徒と関わるときは「できるよ。君のいいところを自分で言ってごらん」という感じなんですね。そして、もし授業中に手を挙げてその答えが間違っていたとしても、発言したその子の勇気をたたえるのです。だから、臆することなく自分の意見が言えるし、他人と意見が異なってもそれが否定されることはありません。

奥田 日本の教育では不足しがちかもしれません。

リリー 私は日本の教育も素晴らしいものだと思いますが、欧米諸国で教育の礎となっている自己肯定感を高めることについては、おっしゃる通り足りていないように思いました。

そこで私は、1年後に帰国したとき、英語という教科を用いて生徒の自己肯定感を育てる教師になると決意したのです。

同じ女子でも 共学校と女子校では大きく違う

奥田 帰国されてからは、高校の先生に？

リリー はい、最初は共学の公立高校に英語教師として赴任しました。そこで、小テスト、中間・

期末テスト、それから学校行事の全てにおいて、いかに一人一人の自己肯定感を底上げするかということに注力しました。手前味噌になってしまうのですが、そうしたら本当に生徒の成績が上がったんです。成長期の子どもたちが自分の能力を信じられると、こんな実力が出せるんだと改めて感じました。

奥田 オーストラリアで実感した、自己肯定感の重要性を実証されたのですね。

リリー そうですね。自己肯定感を底上げするメソッドによって、勉強の成績がアップするのはもちろんのこと、私が担任を持ったクラスは一致団結して学校行事でも優勝し、また、遅刻や欠席も大幅に減りました。

奥田 なんだか先生も生徒も楽しそうです。やはり、自分を卑下したり否定したりするより、ポジティブに過ごしたほうが人生の幅や可能性が広がるのでしょうか。

リリー そして共学校でこうした経験をした後、私は女子校に赴任するのですが、女子だけの環境ではさらにいいものを引き出せるのではないかと感じたのです。

奥田 共学と女子校とでは違うと……。

リリー 私自身は共学出身だっただけに、女子校に赴任して、とてもカルチャーショックを受けたのです。共学の女子と女子校の女子は明らかに違っていました。

奥田 それはどんなところですか。

リリー 女子校の生徒のほうが伸び伸びしていますし、自己解放している感じがしました。思春期ですから、共学で男子生徒の目があると、どうしても女子生徒はそれを気にして自己規制がちです。例えば、ライスの大盛りを食べたいところを少なめに注文したりして（笑）。これは氷山の一角ですが、こうしたことを見て、女子校にしかないメリットやアドバンテージがあるのではな

いかと思ったわけです。

奥田 確かに、共学より女子校のほうが開放的だと聞きます。

リリー そのことに気づいて、私はいろいろな文献をひも解いてみたのですが、女子校についてのアカデミックな研究はされていませんでした。

奥田 社会学や教育学の分野でも、学問的な問題としては捉えられていなかったのですね。

リリー それで「私がやらなければ」という使命感にかられ、悩んだ末に「女の子が幸せになる教育法」の研究をしようと受験勉強を始めました。その結果、社会人入学で同志社大学大学院に2年間、その後、京都大学大学院で1年間の研究生活を送り、修了後はまた女子校の教員となったのです。

奥田 「女の子が幸せになる教育法」を研究されたということですが、大学院ではどんなジャンルを専攻されたのでしょうか。

リリー いまは「グローバルスタディーズ」と名前が変わりましたが、当時は「アメリカンスタディーズ」、つまりアメリカ研究科というところで学びました。キャンパスは京都ですが、教授たちは全員アメリカ人で、アメリカについてなら何を研究してもいいということでした。

私は「アメリカの女子校」について研究したのですが、タイムリーなことに、2006年にアメリカで教育改革が行われ、それまで共学のみだった公立高校に男女別学の学校ができて、その改革の結果が出ようとするタイミングでした。そしてその改革の成果は、とてもドラスティックなカタチで結実したのです。（つづく）

BCNは「ものづくりの環」を支え
育むメディア企業です

使う人
売る人
つくる人

——「ものづくりの環」の詩——

ものを使う人がいます
ものを売る人がいます
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます
その意（おもい）が新しいものを生みます

使う人、売る人、つくる人——
私たちは「ものづくりの環」のなかで
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN

<http://www.bcn.co.jp/>

※この記事は、BCN+Rの「千人回峰（対談連載）」で公開中です。
<https://www.bcnretail.com/hitoarite/>